

## 【公開特別講座】

### 泰緬鉄道と永瀬隆

—— 太平洋戦争期の日タイ関係とたった 1 人の戦後処理 ——

西南学院大学 国際文化学部 片山隆裕先生

日時：2017 年 10 月 20 日（金）15:05 ～ 16:35

場所：F 408 教室

司会：地球社会共生学部助教 齋藤 大輔

司会：早速ですが、特別講義を始めたいと思います。

まず初めに、地球社会共生学部の平澤学部長よりご挨拶をいただきます。

平澤典男地球社会共生学部長：皆さん、こんにちは。

学部長の平澤です。今日は地球社会共生学会主催の特別公開講義ということですので、学会長として初めの挨拶をしたいと思います。

本日は、西南学院大学国際文化学部から、学部長の片山隆裕先生をお招きし、「泰緬鉄道と永瀬隆」と題してご講演をいただきます。まずは天候不順の中、はるばるお越しいただきましたこと、学部を代表して感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

大学名からわかりますように、西南学院大学も青山学院大学同様、キリスト教主義を建学の精神に持った大学です。その意味では、我々と同じ香りのする教育を追求されているものと思います。

今日は、演題として取り上げられましたのは、「泰緬鉄道と永瀬隆」ということです。皆さん、泰緬鉄道という言葉でちゃんとイメージできていますでしょうか。もしかしたら『レールウェイ、運命の旅路』——コリン・ファー

ス、それからニコール・キッドマン、あと真田広之が出演した 2013 年ぐらいの映画だと思うのですが、場合によっては皆さんそれでこのお話をご存知かもしれません。

実はそこに登場する真田広之演じる永瀬隆という人物は、青山学院大学文学部英米文学科の出身ですが、英米文の出身ということで、たまたま英語ができたんでしょう。軍隊に通訳として徴用されました。そして、タイに送られ、泰緬鉄道をつくる日本軍の活動に従事することになりました。

このタイとミャンマーをつなぐ泰緬鉄道というのは、後に「死の鉄道」と言われるほど、その建設に非常に過酷な労働を必要としました。その労働力としては連合軍の捕虜、それから多くのタイをはじめとする東南アジアの現地の労働者が使われたんですね。永瀬氏は通訳として行ったにもかかわらず、軍隊に従軍していたわけですので、さまざまな経験を積みました。この数奇な運命の中で、戦後非常に悔やむ部分があったのでしょうか。その贖罪の活動をやがて一人で始めることになります。こういった数奇な運命をたどってどう生きたかということを、本日は片山先生のご研究の中から、私たちは知ることになります。

青山学院の学生ならば、知っておかなければならない話です。また、皆さんの中にはタイへ留学した、あるいはこれから留学するという人もいるでしょう。この話は青山学院大学とタイをつなぐ、幾つかの話の中の 1 つとして心に刻んでもらいたいと思います。詳しい話は、今日の講演の中から皆さんが学んでいただけるものと思います。どうぞ真剣に聞いていただきたいと思います。

それでは、片山先生よろしくお願いいたします。

司会：平澤先生ありがとうございました。

では、早速講演のほうに入っていきたいと思います。

西南学院大学国際文化学部学部長の片山隆裕先生よりお話をいただいて、その後に質疑応答の時間を設けたいと思います。よろしくお願いします。

(拍手)

片山先生：皆さん、こんにちは。

福岡の西南学院大学の国際文化学部から来ました片山と申します。

青山学院大学の相模原キャンパスに来るのは今日初めてなんですけれども、とても楽しみに参りました。ちょうど齋藤先生が20年前僕の学生で、最初に一緒にタイにフィールドワークに行って、それ以来20年間のお付き合いになります。地球社会共生学部の先生方とは、何人もの先生方とタイで一緒にいる機会があって、特に齋藤先生とか林先生などとは、タイでお会いする機会のほうが多いですね。そういうご縁で今日はこちらでお話をさせていただくこととなりました。

今日のタイトルは「泰緬鉄道と永瀬隆－太平洋戦争期の日タイ関係とたった1人の戦後処理－」というタイトルでお話をさせていただきます。

私はタイ研究を、30年以上になりますけれども、やっていまして、斉藤先生が学生だったころは、タイの北部のチェンマイ、チェンライという山岳地帯が多いところで、山岳少数民族の村やタイ人の農村でフィールドワークをしていました。最近は少し南に下りまして、バンコクあるいは今日お話をしますカンチャナブリですね。カンチャナブリというのはバンコクから西にバスで約2時間半から3時間行ったところにあります。そのカンチャナブリなどをフィールドにして、研究調査をしたり、学生たちを連れて行ったりしています。

今日このタイトルでお話することになった理由は幾つかありまして、1つは、平澤学部長先生からもご紹介がありましたように、タイトルの永瀬隆さん、この方は2011年にお亡くなりになりました。93歳でしたが、この方は青山学院の英語科の出身で、旧日本陸軍の通訳として戦争に従軍されていました。ちょうど青山学院を卒業して陸軍に入って、英語ができるもんですから通訳として従軍し、赴任地であるタイに行って、タイは当時日本軍がたくさん進駐していて、太平洋戦争における南方、東南アジアでの拠点となっていましたので、そこで陸軍の通訳として働かれたんですね。

その関係で、今日お話しする「泰緬鉄道」という、タイとビルマを結ぶ

415 キロに及ぶ鉄道建設に日本軍がかかわったときに、当然日本軍だけでは建設できませんから、たくさんの当時の敵国である連合軍の捕虜、それから現地から徴用しました、あるいはうまいことを言って連れてきた、高い給料を出すよと言って連れてきた、あるいは無理やり連れてきた、そういう徴用工で、現地では「ロームシャ」という日本語が残っていますけれども、その労務者たちを大体 30 万人以上使って鉄道建設をします。

そのとき連合軍というのは、一番多いのはイギリス人兵、それからオランダ、オーストラリア、あと少しですけれどもアメリカ、ニュージーランド、みんな英語圏の人たちですので、この永瀬隆さんが通訳として任務に就いたということです。

そこで、なかなか泰緬鉄道も永瀬隆も、私もそうですけれども、学生のころは全く知らなかった。中学や高校の歴史の教科書に全く出てきません。ここで日本軍が行ったこと、あるいはその泰緬鉄道建設を取り巻くアジア太平洋戦争の詳しい話というのは、世界史や日本史で受験の知識としては学びますが、それ以上のことは学ぶことは少ないと思います。

地球社会共生学部の皆さんたちは、皆さん、特に 2 年生の時点でタイやマレーシアに留学をされる。この学部の学生さんもタイで何人かお会いしたことがあって、一緒にお酒を飲んだり話したりしたことがあるんですけども、すごいプログラムを実施されている学部で、そういう学部の学生さんであるからこそ、やはり日本が東南アジアで行ってきたことの一部でも、少しでも基礎理解として知っていただきたいと、そういう思いでこのタイトルでお話をすることにしました。

今、皆さんにお配りしているプリントが 2 枚ありますが、1 枚目のほうは、タイトルと今日お話しする内容を左に書いています。そして右のほうには、今日の話に関係する参考文献、比較的手に入りやすい参考文献を挙げていますので参考にしてください。

話の具体的な内容は、正面のスクリーンに映して、文字資料それから画像資料、ときに映像なども交えながら、皆さんに泰緬鉄道と永瀬隆さんとの関

わり、我々日本人とどうかかわっているか、その一端をお話しできたらと思います。

それでは、スクリーンのほうでお話をさせていただきます。

まず皆さんにお勧めしたい本として、この「クワイ河に虹をかけた男」という本があります。この本は、満田康弘さんという岡山県と香川県をエリアにする瀬戸内海放送というテレビ局の番組製作チームプロデューサーの方なんですけれども、この方がお書きになった永瀬隆さんの戦後の活動を20年にわたって追いかけた本。ほぼ同じタイトルのものが映画化されていて、「クワイ河に虹をかけた男」ということで映画にもなっていて、これも非常に数々の賞を受賞しているドキュメンタリー作品です。

いろいろ参考文献を挙げている中で、この本を読んでいただくと、皆さんの大先輩である永瀬隆さんの活動が、非常によくわかります。なぜそういう活動を永瀬さんがしてきたのか。そういう活動に永瀬さんを駆り立てたのか、そのことが追いかけられる本だと思います。

それでは、中身に入っていきたいと思います。「泰緬鉄道」、泰緬の泰はタイランドのタイ、緬はビルマですね。今はミャンマーです。この泰緬鉄道というのは、正式名称を泰緬連接鉄道と言いまして、第二次世界大戦中に日本軍がタイのノンプラドックというところから、ビルマのタンビュザヤというところまで強行敷設した鉄道です。全長415キロに及びます。

この鉄道建設には、それを指揮した日本軍の兵士1万2,500人をはじめ、アジア各国から徴用された労務者、イギリス、オランダあるいはオーストラリア、アメリカ、ニュージーランドからの連合軍の捕虜、この連合軍の捕虜というのは、鉄道建設が始まる4カ月前に、昭和17年2月7日から15日まで行われました日本軍と連合軍との戦闘、シンガポールの戦いですね。シンガポールというのはアジアのマラッカ海峡のところにある非常に重要な拠点で、イギリスが重要な拠点として軍事施設を持っていたんですけれども、ここを日本軍が攻略し、たくさんの捕虜を獲得する。その捕虜たちが、非常に劣悪な環境の中で列車にさせられて、タイまで連れてこられて鉄道建設に従

事する。そういった鉄道です。

そういう中で、欧米人の捕虜が約 6 万 2,000 人、アジア人労務者は推定ですが、20 数万人と言われていて、一説には 30 万人以上という資料もあります。たくさんの人が巻き込まれました。

この鉄道建設は、後に「デス・レイルウェイ」（死の鉄道）と言われて「枕木 1 に人 1 人」というふうに言われるように、枕木というのは列車のレールがある横に通してある木ですけれども、その枕木を 1 本布設するのに人が 1 人亡くなるというぐらい、たくさんの犠牲を払って建設された鉄道です。1942（昭和 17）年 6 月に建設が開始されて、翌年の 10 月に完成しました。1 年 3 カ月余りです。これが鉄道建設の路線ですけれども、この地図の右下にあるのがバンコクです。バンコクから少し西に行きます。ここが起点になってずっと直線に伸びてビルマに至っています。

今日お話をする場所というのはこのあたりでカンチャナブリ、タイには何とかブリという町がたくさんありますけれども、ブリというのは、「町、都市」という意味です。カンチャナというのは「黄金の」という意味で、「黄金の町」という意味ですけれども、そう名付けられた町を中心にお話をします。

現在もこの 415 キロの鉄道のうち、百数十キロがタイ側に残っていて、タイ国鉄の管理下で使われています。これはカンチャナブリ駅、駅のホームで、この写真を見ていただくとわかるように、今は観光地として世界中からたくさんの観光客でにぎわっています。

これは有名なクワイ河鉄橋、本当はメークローン永久橋というんですけれども、鉄橋で、1 日に列車が季節によりますが、3 本から 4 本しか通りませんので、列車が通らない時間帯は鉄橋の上を歩いて渡ったり、行ったり来たりできる。日本で鉄道とか鉄橋で写真を撮ってインスタに載せると大変なことになりますけれども、ここでは大丈夫。ただし、列車が来るときは危ないので、鉄道の係の人が危ないよというふうに知らせてくれます。

実は、この右の写真の後ろ姿の方が、さっきご紹介した「クワイ河に虹をかけた男」の本を書いて、映画の監督もされた満田さんという方です。今日

この話を私がさせていただくに当たって、学内に大きなポスターを貼っていただいていますけれども、そこで使っている写真は、この満田監督から提供を受けた写真です。

列車から車窓を見ますと、こういう河の風景ですね。現在も普通の生活列車兼観光列車として使われていますので、こういう風景を見ることができます。

しばらく川沿いを走っていきまして、鉄道建設で415キロ建設するに当たって大変難所が幾つもあります。これは「アルヒル栈道橋」といいます。下をちょっと見ていただくとわかるんですが、木橋ですね。木で組まれている崖っぷちにある橋。こういうところを鉄道建設をしているわけですが、今でもここを通るときは、本当に列車から、窓から手を伸ばせばその崖に触れるぐらい近い。木でつくられた橋ですので危ないので、列車もここではスピードを落として、時速5キロぐらいで走ります。

そこを通っているビデオを準備してきました。余り窓から顔を出すと危ないんですけども、ここはどうしても出たくなる、顔を出して写真を撮りたくなる場所で、現在も途中の駅であるタムカセーという駅のそばには洞窟があって、ここは洞窟寺院としても使われています。観光客の多くはここで降りる人が多いところです。

実は私たち西南学院大学の国際文化学部では、今年から「戦争を歩く」という授業をやっています。2年前の2015年に終戦70周年を迎えたときに、だんだん戦後70年もたつと、戦争を体験した人、語れる人、受け継ぐ人がどんどん少なくなっていく。そういうことに対して非常に危機感を持ちまして、「戦争を歩く」、「戦争を記憶する」という、一般市民向けの公開講座をやりました。それをもとに大学の必修の授業として、「戦争を歩く」というオムニバス形式の授業をつくって、大体6人から7人の教員が2週間ずつ担当するという、それをやりました。

それと関連して、今年から「戦争をフィールドワークする」という学生向けのプログラムを開始しました。何人かの教員が世話係になって、私はタイ、

泰緬鉄道ですね。それからもう一つのグループは中国の長春、ハルピンという東北部に行って、731部隊という細菌兵器を日本軍が開発していたところに連れて行く。もうグループは、来年になりますけれども、ポーランド、アウシュビッツ収容所に連れて行く。そういうプログラムを実施したんですけれども、このグループの中の1つのグループかタイということで、そのときに連れて行った学生さんです。ちょうど今短いビデオでお見せした、手を伸ばせば崖に届く、そこで1回降りて、線路をずっと歩いているところです。

これは僕の写真ではなくて、インターネットから借りてきたんですけれども、こういうところを鉄道建設、つまり厚い大きな岩盤があるところを、今みたいに強力なダイナマイトとか重機があるわけではありませんので、それを小規模のダイナマイトで爆破して、あとは全部手掘りです。1日に、毎日毎日14時間から16時間の労働を、捕虜や労務者にさせて鉄道建設をした。そういう難所の1つです。

現在、タイ側の終点の町として、駅としてはナムトックという、タイ語ではナムが水、トックが落ちる、落ちる水で滝という意味ですけれども、ナムトック駅ですね。ここがタイ側の現在の終点になっているところです。

そこからさらに先に行ったところに、「ヘルファイヤーパス」と言われているところがあります。ここは、少し線路の一部が残っていますが、ここもものすごい難所で、ヘルファイヤーというのは、地獄の業火の道ということですから、その鉄道建設を夜遅くまでさせられている中で、そういうふうに地獄の業火のように見えたそうです。そういうところからつけられた名前です。ここに行きますと、元連合軍の捕虜で亡くなった方へのメッセージや花や国旗などが置かれていまして、右の写真の下をちょっと読むと、from your loving family と書いてあります。この亡くなった方のご家族が持ってこられたんですね。こういうのがたくさん残っています。

さて、この泰緬鉄道というのは、いつからどうやって有名になったかというと、私は今年還暦を迎えたんですけれども、私と全く同じ年の60年前にできた映画「戦場にかける橋」(The Bridge on The River Kwai) という、英米

合作の映画、この中の舞台として取り上げられて大変有名になりました。はっきり覚えていないんですけども、この映画はアカデミー賞の7部門ぐらいいを受賞した映画で、ということは世界中の人が見るわけです。この映画は間違いがたくさんあるし、うそもいっぱいあるんですけども、それを見た人が、このカンチャナブリ、この橋の存在、鉄道の存在を知って、一気に世界で有名になりました。

この映画は、第二次世界大戦中の1943年のタイとビルマの国境付近にある捕虜収容所を舞台に、日本軍の捕虜となったイギリス軍兵士らと、彼らを強制的に泰緬鉄道建設に動員しようとする日本人兵士の対立と交流を通じて、極限地帯における人間の尊厳と名誉、戦争の悲惨さを表現した映画です。これは1957年にできて、その10年ちょっと後ぐらいから、この映画の影響で本物の橋を見てみたい、ここに来てみたいという人たちが徐々に出てきて、それをタイ政府がいわゆる観光資源として使うようになっていくわけですね。

この映画タイトルがThe Bridge on The River Kwai、クワイ河というのが出てきますので、本当はこの河はメークローン川というんですけども、クワイ河とわかりやすく名前を変えたりして、戦場にかける橋の橋だよというふうに説明するようになりました。ただこの映画は、こういう橋が映画に出てくるんですけども、タイで撮影されたものではなくて、スリランカでロケが行われたものです。そして早川雪洲さんという日本人の俳優さんと、アレックス・ギネスというハリウッ드의俳優さんがダブル主演で、日本軍の兵士、かなり上の身分の兵隊さんと捕虜の一番トップ、この2人のやり取りを中心に描いたものです。

ただし、この映画は1957年に描かれたということで、戦争が終わって12年しかたっていません。12年ですので、まだまだ今から見るとかなりいろんな間違いや偏見や、欧米から見た東洋への視点、オリエンタリズムという言葉、皆さん授業で習ったのではないかと思います、そういうものがふんだんに入っていて、ほぼ作りものと思って見たほうが間違いありません。

歴史的に事実を元にはしていますが、映画の内容は作りものですね。

実はこの作りものであることを明らかにした本があって、これが後で紹介します、青山学院卒の永瀬隆さんが書かれた「戦場にかける橋のウソと真実」という皆さんにお配りした参考文献の真ん中あたりに書いています。永瀬隆「戦場にかける橋のウソと真実」、これは岩波ブックレットという薄い冊子のような本ですので、すぐに読めて、ちょっと勉強してみようかなと思う人がいたら、この本を、60 ページぐらいたと思いますので、まず読んでみると入り口として、非常によくわかると思います。

この映画の中では、捕虜収容所を脱走した連合国軍兵士がいるんですけれども、その兵士に現地のタイ人女性、あるいはビルマ人女性とおぼしき女性がずっとくっついていて、荷物運びとして手伝っている。その途中で泉があるところで水浴びをしたりして、キャーキャー騒ぐんですけれども、こういうことは実際のタイ人女性、ビルマ人女性は、今でもそうですが、当時の人は絶対にあり得ない。こういうふうには映画の中に出てくる、西洋から見た東洋へのさまざまな思い込み、憧れ、偏見、そういったものがふんだんに折り込まれている、そういう見方をするのも面白いかと思います。

それから、日本の鉄道建設の視点として見ると、実は当時の日本の鉄道建設技術は世界にも名立たるものだったそうで、この映画の中ではかなり、イギリス人の捕虜の力でできたという感じで作ってありますので、日本人から見たら、特に鉄道建設の専門家が見たら、さまざまな問題点も含んでいるものであると。ただし、プラスマイナスはあるにせよ、少なくともこの映画が、カンチャナブリという町そしてクワイ河鉄橋というところを有名にしたという点では、非常に意味のある映画の1つではなかったかと思います。

ただし、実態がわかっていないこともありますけれども、この日本軍兵士として従軍した中には、当時日本が植民地支配をしていましたので、韓国・朝鮮系の人たち、兵士がいたり、あるいはさっき言いましたように労務者、現地労務者も数十万人いたんですけれども、この人たちに関しては、ほとんど記録が残っていないということで、解明が待たれるんでしょうけれども、

なかなか難しいところでもあります。

では、この映画を通して有名になったこの橋、鉄道は、どういう背景のもとつくられたかというのを見ていきたいと思います。

第二次世界大戦は、皆さんご存じのとおり 1939 年に起こります。その翌年に、当時の日本の外務大臣の松岡洋右、松岡洋右というと国際連盟を脱退したとか、そういうことでも歴史で習うと思いますが、大東亜共栄圏という言葉を使います。大東亜、広くアジアや太平洋地域を欧米の支配から解放すると、そういう名目のもとに日本軍はこういう言葉もつくり、こういう言葉やささまざまなキャッチフレーズ、シンボリックな用語などのもとに、戦線を南方に拡大していくことになります。

その 1 つは、石油、ゴム、ボーキサイトなどの戦略物資が東南アジアに豊富にあるということだったんですけれども、実はこの時期までの日本及び日本軍のあり方、国際連盟を脱退するとか、日中戦争を泥沼化するんですね。そういう中で、アメリカによる石油禁輸措置というのが取られて、日本は石油が入ってなくなります。そういう背景があって、南方と言われる東南アジア方面に拡大していこうというふうになったわけです。

もう一つは、援蒋ルート。中国大陆では、日本軍は当時中華民国の国民政府のリーダーになった蒋介石、後に台湾に移っていきますけれども、蒋介石と戦っているわけですが、そこにアメリカとソ連がいろんな援助をする。そういう援助のルートを援蒋ルートと言いますが、これを遮断するという目的もあった。フランス領インドシナ、現在のベトナム、ラオス、カンボジア、フランスが植民地支配をしているところに進出をし、次第にマレー半島に上陸し、東南アジアで軍事展開をするというふうになっていくわけです。そして、皆さんご存じのとおり、1941 年、昭和 16 年 12 月 8 日には真珠湾攻撃をすることになります。

同時にこの日は真珠湾だけ攻撃したわけではなくて、日本軍はマレー半島の 6 カ所から東南アジアに上陸をします。実は、半日だけタイと戦闘状態になって、タイと日本軍が戦争しているのが 12 月 8 日です。

これはいろいろ背景があるんですけども、当時日本軍はタイ政府に上陸許可を求めて、タイに駐留することを求めるんですけども、タイの首相がたまたまこの日にいなくて、カンボジアに出張していて、上陸許可を出すのが遅れた。あるいはわざと遅らせたか。しかし強引に日本軍は上陸をした。そこにタイ軍と警察が応戦をする。そういう半日間だけの日タイ戦争が行われた。こういうこともあまり知られていないと思いますけれども、タイの南のほうは細くマレー半島になっていますけれども、その幾つかの町に行きますと、その跡、戦争碑、そんなにたくさん残っていませんけれども、見ることができます。

実は、この戦争に関して、アジア太平洋戦争に関してはさまざまな研究がなされて、本が出されているんですけども、実は先の先を考えない。当然先の先の先の先とかを考えない、一種賭博のような形での開戦であり、日本軍の戦争の進め方というのは、余りちゃんと考えていない。こうなるだろう、こうはならないだろうという相手任せで、しかもかなり希望的観測のもとに戦争を進めていったということが、いろんな本に書かれています。

当時のアメリカとの経済力を比較すると、石炭・鉄鉱石生産高で 10 対 1、自動車生産では 100 対 1、もうかなうはずがないですね。軍事力を比較しても単純にかなり日本によく見積もっても 10 対 1、アメリカ 10 に日本 1、これくらい差があったんです。ところがそれでも勝てるかもしれないと、当時の軍部の首脳部は考えました。なぜか。

まず、戦争はアメリカの近くで行わない。日本の近くの西太平洋地域で展開されることになるから、日本に近いので 10 対 1 の力関係をうまく見積もれば 4 対 1 ぐらいにはさせられるだろうというご都合主義。4 対 1 でも負けているんですけども、日本軍、特に東條英機、当時の陸軍大臣、後の首相、どう考えたかという、4 対 1 か、4 対 1 ならまあ日本人のほうがアメリカ人よりも精神力が優れているから、この 4 対 1 ぐらいの差は埋められるだろう。したがって、1 対 1、互角の戦いができるだろうという形で、一か八かだったんですね。

当時の東條英機陸軍大臣は、「たまには目をつぶって清水の舞台から飛び降りるのも必要だ」ということを言って開戦をしている。「開戦後2年間は確かな計算が立つが、3年以降は何もわからない」と、政府の大本営連絡会、これは特に山本五十六という連合艦隊司令長官の言葉なんですけれども、山本五十六という人は戦艦大和に乗っていたんですね。彼はアメリカ留学経験もあっても、アメリカのことをよく知っているので、まともに戦ったら勝つわけがないと思っています。でも軍人だし、トップだし、やらなくちゃいけない。それで、ほかの軍の首脳部に聞かれると、「1年か2年だったら何とか暴れてみせましょう。しかし、それ以降はどうなるかわかりません」と。ということは、もう敗戦を覚悟していたんですね。そういう状態の中で戦争に突入していきます。

一つは精神によって越えられるという精神主義、その精神の担い手であるはずの人間は、絶対的に不足している物、例えば石油とか経済力とか、そういう物とは違って、幾らでも補充できるという物神主義というのが混在していったんですね。最初から単なる経済力、軍事力の差だけではない、一か八か、適当、いいかげん、何とかなるだろうという感じで突入していきます。

戦争というのは、最初うまくいっているときに、どこで終わらせるかというのが戦略的には大事だと言われます。ところが、最初は日本軍は破竹の勢いで快進撃だったんですけれども、あとで泰緬鉄道建設のきっかけになります、ミッドウェー海戦で大惨敗を喫して、それから一気に戦局が変わっていきくんですね。そういう戦争です。

これは、日本軍の第二次世界大戦期の拡張政策の地図で、カンチャナブリというところにあるタイ・ビルマ鉄道博物館という、オーストラリア人のビーディーさんという人が館長をしいる博物館。そうやって日本軍は当時欧米の国々が支配していたマレー半島、フィリピン、インドネシア、ビルマを中心とする東南アジア大陸部、インドシナ半島、そういうところから敵を追い出して支配を拡張していこうとしたわけです。

この赤い線が日本軍の最大の前線基地にあって、ここは絶対死守しなければ

ばいけないと、当時思われていた。1942 年時点ですね。しかし、当時死守しないといけないというのは、こっちの勝手な考えで、じゃあこの赤い線の内側は日本軍が支配しているから入りませんと言うわけがないですね。そういうところにも日本のご都合主義が見え隠れします。

さて、そういう第二次世界大戦、アジア太平洋戦争に入っていく中で、当初日タイ関係はどうだったかといいますと、日タイ関係は昔から非常に良く、戦後の一時期を除いて良好な関係にありました。近代になって、タイとの国交が回復されるのが 1887 年、明治 20 年になりますけれども。「日暹和親通商に関する宣言」というもので、ちょうど今年で国交回復 130 年になります。

その後タイは、チュラーロンコーン大王という王様、ラーマ 5 世ともいえますけれども、タイで一番優秀な、トップの国立大学チュラーロンコーン大学という、もしかしたら皆さんたちの中にも留学をされる予定がある方がいるかもしれません。その王様の名前がついた大学がありますけれども、チュラーロンコーン大王が在位期間というのが 1868 年から 1910 年、これは日本にすると明治元年から明治 42 年です。ということは、明治天皇の在位期間、日本が富国強兵殖産興業で国力を増強しようとした時代とタイの近代化の時代が全く重なるんですね。

その時期にタイは日本からもたくさんいろんな人を招いて養蚕業、シルクを盛んにしたり、あるいはタイで一番最初にできた女学校、ラーチニー女学校。これは日本人の教育者である安井てつさんという東京女子大学の創設者を招いて創ったり、いわゆる日本人がお雇い外国人として、タイの近代化にもかかわっていて、そういう時代でした。

そういう時代を経て、1920 年以降、さらに交流が密になるんですけれども、1920 年代というと、1918 年に第一次世界大戦が終わります。アメリカはその後景気が悪くなって、29 年の大恐慌に至りますが、日本は比較的、多少のあおりは受けますけれども、タイとの関係に関してはどんどん深めて、商船会社の定期航路が開設されたり、暹羅協会というんですけれども、シャム

協会、今の日泰協会ができたりして、日本とタイの貿易額は増加していき、有名な会社、伊藤忠商事とか三菱商事など、バンコクにどんどん支店を開設していった、特に 1940 年ぐらいからは戦争を準備する必要性から、タイ米、戦略物資、ゴム、タンゲステン、くず鉄、獣皮などのタイからの輸入が非常に増えていくんですね。つまりタイ、それからその周辺の国々も日本にとって非常に重要な地域となっていくわけです。

その中で、さっきの繰り返しになりますけれども、1939 年に第二次世界大戦が始まったときに、タイは当初イギリス、フランスなどと不可侵条約を結び、日本とは友好親善条約を結んで中立の立場をとっていました。しかし翌年、ドイツがフランスのパリに侵攻して占領して、フランスの力がヨーロッパ戦線に注がれて、東南アジアが手薄になるというところで、タイはフランス領インドシナを取りかえそうとします。というのは、実は今のタイの面積というのは 51 万 4,000 平方キロメートル、日本は 38 万ですから、日本の約 1.34 倍です。これに対して、19 世紀の終わりのタイ（当時のシャム）の支配地域は約 100 万平方キロ、2 倍ぐらいあったんですね。ところが独立を守り続けるために、イギリスやフランスに自分の領土や支配地域を割譲しながら何とか独立を保った。そこで失ったラオスとかカンボジアなんかの失地を回復するためにフランスと交渉するんです。返してくれと。ところがフランスが嫌だと言ったもんですから戦闘状態に入る。

そこにうまくつけ込むのが日本で、まあまあと言って仲介をして、フランスのインドシナに日本軍が足がかりを持とうとするわけですね。当初は中立だったんですけれども、中立だったのでタイとしてもどちらにつこうかというのは、かなり悩むところだったと思いますけれども、結局日本と同盟関係を結んで、連合軍と戦う立場になっていきます。

バンコク市内に戦勝記念塔というのがありまして、BTS という市内を走る高架鉄道の駅の 1 つにもなっていますけれども、そのフランスと失地回復でやりあったときのものを記念する塔もあります。

さて、日本とタイは同盟関係を結んだと言いましたけれども、日本はその

周辺諸国、イギリスやフランスや、インドネシアなどオランダの植民地になっている周辺諸国で戦争をするために、タイに進駐をしたいがために、当時のタイの首相であるピブーン・ソンクラームという首相にタイ領内に入ることを求める。しかし、さきほど言いましたように、ピブーンさんがカンボジアに行っていたので返答が遅れたんですね。その間に日本は陸路と海からタイに上陸をしました。

これに関しては、「少年義勇兵」という 2000 年のタイ映画があります。これを見ていただくと、当時の様子、その背景が、映画ですからかなり脚色してありますけれど、ある程度わかるというものです。しばらく後に日泰攻守同盟条約、翌年 1 月には日泰共同作戦に関する協定というのを締結すると、タイは日本と同盟関係を結んでいるので、英米に対して敵対の立場を取らざるを得なくなるわけですね。

これが 12 月 8 日に日本軍がタイに上陸した地点です。

しかし、タイも当時一枚岩ではなくて、抗日自由タイ運動といって、ヨーロッパに留学をしていた優秀なエリート官僚などを中心に、日本との同盟関係を強化するのに反対の人たちがいて、そういう人たちが地下組織をつくって、日本の情報を連合軍に伝えたりしていました。そういうこともありまして、非常に複雑な状況に置かれていたというのが当時のタイです。

そういう中で泰緬鉄道がいよいよ建設されるんですが、真珠湾の奇襲攻撃の後、日本軍は華々しい勢いで勝ち続けます。特に、1942 年の 2 月には、シンガポールを占領します。当時のイギリス首相であるチャーチルが、イギリス最悪の敗北だと、最大の屈辱だという言葉を残しているように、兵力では日本軍のほうが少なかったんですけれども、シンガポールを攻略してたくさん捕虜を得ました。それを記念して発行された切手です。シンガポール陥落と右にありますけれども、乃木希典、東郷平八郎という日露戦争などで活躍した軍人の肖像画の載った記念切手が発行されています。

ところが、最初に山本五十六連合艦隊司令長官が予測したとおり、「最初の 1、2 年は暴れてみせるが、その後はどうするかわからない」といったよ

うに、約半年後にハワイの近くにあるミッドウェー島、この新聞でいくと、ハワイがこの辺で、ミッドウェー島というところで戦闘を、アメリカの海軍と日本海軍が激突します。

実はこのときも、アメリカ海軍は航空母艦にたくさんの飛行機を載せて、そーっとミッドウェー島に近づいているんですね。日本軍はミッドウェーが簡単に攻略できると、というのは真珠湾でうまくいっていますので、またうまくいくだろうという、成功体験があだになるんですけれども、ところがとんでもないぐらいアメリカ軍の戦闘力は高く、そこで大敗北を喫します。それが大敗北なんですけれども、当時の様子を伝える朝日新聞がこれです。「ミッドウェー沖大海戦、アリューシャン列島猛攻、陸軍部隊も協力、要所を奪取、米空母2隻、エンタープライズ、ホーネット撃沈、我が2空母1巡洋艦に損害」とあります。

しかし、当時の状況と今の状況と似ているのが非常に心配なんですけれども、これ本当のことではない。実は日本はこのとき2空母、1巡洋艦の損害ではなくて、4隻の空母をやられています。ですから、ちょっと底上げをして報じている。朝日新聞というと、今進歩的な記事が多いんですけれども、戦争の中ではこういうふうになってしまうんですね。非常にいろいろ考えさせられるものだと思います。

これがその撃沈される、沈む前の加賀という航空母艦。航空母艦はたくさんの戦闘機を載せて運んで、そこから飛行機を飛ばせて爆撃をするので、非常に重要なんですけれども、これを4隻撃沈されることによって、日本海軍は太平洋地域における制海権、及び制空権を極端に狭められることになる。これは、その前のシンガポール陥落のときの朝日新聞ですけれども、「敵軍我が軍門に降る。ついに無条件降伏で屈服す」など、この辺までは本当のことだったんですけれども、不利なことは伝ええないという、これは大本営発表といういい方で、今でも日常会話で使うことがありますけれども、当時の大本営、首脳の方の戦況の発表というのはいくらもなかった。

実はこのミッドウェー海戦で大惨敗を喫して、帰ってきた日本兵がいるわ

けですね。そのときの淵田という兵士がいて、この人は真珠湾攻撃のときに功績を残した日本軍の英雄なんです。英雄なんですけれども、ミッドウェーで敗北したので、日本に帰ってきたときに当時の軍部に幽閉されて、絶対しゃべるなど。ミッドウェーのことをしゃべるなどということで、そこで戦った兵士は箝口令をしかれた。そういうふうになるんですね。言いたいことは言えない、言っではいけないこととか、言わなければいけないことを言っではいけない。そういう時代でした。

このミッドウェー海戦の敗北、それからその後のガダルカナル島というニューギニア島の少し東にあります、これも日本軍の重要拠点だったんですけれども、ガダルカナル島からの撤退、これは1942年の夏ぐらいから半年ぐらい攻防戦があるんですが、その後ガダルカナルから日本は撤退します。アメリカが攻めて。このとき最初は5,000人ぐらいの兵隊さんが守っていたんですけれども、大損害で全滅に近い状態になる。この一報を受けた日本の軍部は、そんなはずはない、負けるはずはない、何かの間違いじゃないか。でもとりあえず援軍を送ろうというんで、近くの島の部隊を3,000人送る。で、また負ける。次また3,000人送って負ける。おかしい、そんなはずはない。これを繰り返すんです。

目算が全くない。希望的観測によって戦争が進められていったことによって、ますます戦況は悪くなっていきます。

それで、制海権と制空権を太平洋地域でなくすので、あと残っているのは陸ですね。ということで泰緬鉄道を建設するというふうになります。特に、海に関してはマラッカ海峡、今のシンガポールのところを経由してビルマのほうに物資を補給していたんですけれども、海上が押さえられるということで、じゃあ陸に造ろうというので、タイからビルマのほうに400キロ余りの鉄道を建設しようということになりました。

皆さんにお配りしたプリント、もう一枚のほうに、泰緬鉄道の建設にかかわる建設要綱ですとか、泰緬鉄道の建設命令、これは後ろのほうにちょっと書いてある参考文献からとってきたものなんですけれども、こういう文が出され

て建設が開始されます。

建設は、非常に苦難を極めるわけなので、そういうときには景気のいい歌がつくられた。鼓舞するために。それは資料3の泰緬鉄道建設の歌、作詞作曲不詳、著作権不詳、いつできたかもわからない。1番を見てみますと、「東亜の平和築かんと、敢闘の意気燃ゆるとも、動脈一路泰緬の、大地を結ぶこの壮挙、今ぞ遂げたりこの偉業」ですね。それから3番を見てみましょうか。「篠つく雨や濁流に、身をば挺する強者の、鮮血紅く河を染め、築く幾多の鉄の橋、ああ建設の人柱」こうした威勢のよさの中に、3番の詞などを見ると、非常にこの3行の詞の中に、ものすごく大きな犠牲が払われたことがうかがえるというものです。

この鉄道建設には、昭南島、昭和に奪った南の島、すなわちシンガポールでの捕虜たちをたくさん連れて行くんです。連合軍捕虜が、1両の列車にぎゅうぎゅう詰めになされて、シンガポールからマレーシアを通してタイに連れて行かれました。そして、当然捕虜だけでは建設が追いつかないので、タイの地元の熟練工、それからマラヤ人労務者、マレーシアからの労務者、これは7万8,000人も徴用している。とにかく労務者と言われている現地の人たちは20数万人使って労働をさせるんですね。

過酷な労働によって、それから食料も不足していますから、栄養不足で栄養失調、それから伝染病などにかかってどんどんどんどん死んでいくんですね。その死亡率というのが、マラヤ人出身の労務者の死亡率は38%ということは、7万8,000人ですから、3万人ぐらいが亡くなっているということになります。ジャワ人45%、連合軍捕虜20%、大体1万3,000人が亡くなっている。

そういう多くの犠牲を払って泰緬鉄道が建設されますが、造っては連合軍の空襲に遭い、造っては空襲に遭い、そういうのを繰り返していました。ちょっと写真が見にくくて申しわけないんですけども、レールを枕木に取りつけるオーストラリア人とイギリス人の捕虜。連合軍の爆撃で1回つくれたけれども壊された橋です。

この泰緬鉄道建設に関しては、実は日本で出版されている本というのは非常に少ない。ところが、イギリス、一番捕虜が多かったイギリスでは 300 冊以上の関連本とか、当時の絵心のあるイギリス人の兵士がずっとスケッチをして描いた画集とか、そういうものがたくさん出版されている。

その捕虜収容所の様子を。ちょっとわかりにくいんですけども、これは JEATH 戦争博物館、Japan、England、America、Thailand、Holland、オランダ、この 5 つの頭文字がつけられた博物館で、戦争博物館ですけども、この戦争博物館は最初はこの案もあったんです。J のかわりに D、DEATH 博物館、さすがにちょっとまずいだろうというので、今の名前になっているんです。ちょうど捕虜収容所のように、1 階建てのヤシの葉っぱでふいたような展示スペースに、当時の写真がたくさん展示されています。

私がここを初めて訪れたのは 31 年前で、タイの研究を始めたばかりのころに、カンチャナブリというところで、短い期間、2 週間のフィールドワークをしました。そのときに行ったんですけども、余りの悲惨な展示に気分が悪くなって出てきたことがあります。今は、当時のめちゃくちゃ悲惨な展示のものは若干取り払われているような感じで、あるいは私はもう何十回も行っているから、それに慣れたのかもしれませんが、最初に行ったときの強烈な印象は今でも忘れられません。

こうやって見てもらうとわかるように、日本軍の兵隊さんたちもみんな若いですね。皆さんたちとそう変わらないぐらいの年齢の人たちがたくさん徴兵されていったんです。日本軍は連合軍の捕虜たちにかなりひどい扱いをしたと言われています。なぜか。これは捕虜に対する保護をうたったジュネーブ条約というのと、当時日本の東條英機陸軍大臣が全軍へ示達した「戦陣訓」がものすごく乖離していたからなんです。ジュネーブ条約は博愛主義、人道主義、生きるための人権を擁護するということがうたわれているので、捕虜でも、敵軍の捕虜でもちゃんと手厚く扱わないといけない。ところが日本は調印したものの批准もせずにいた。これに対して戦陣訓というのは、「生きて虜囚の辱めを受けず」、つまり捕虜になって生き延びるのは恥ずかしいこ

とだと。それだったら潔くお国のために、天皇陛下のために死ぬべきだ、そういうふうには日本人の兵士たちは洗脳されていますので、捕虜となるのは恥ずかしいことだった。だからいくら虐待してもいいという理屈になっていくわけです。この戦陣訓、「生きて虜囚の辱めを受けず」とありますけれども、これをずっとすり込まれていくと、そういうふうになるのかもしれませんが。ジュネーブ条約と全く反対ですね。

実はそういう捕虜の使役や虐待の場面に立ち会ったのが、元日本陸軍の通訳をしていた永瀬隆という青山学院出身の方です。永瀬さんは岡山に生まれて、たまたま昭和 16 年、戦争が始まるときに青山学院を卒業しましたので、そのまま陸軍に入隊するんですけれども、英語ができるので通訳の職につくことになります。そしてタイに赴任して、泰緬鉄道建設の通訳に携わる。

ところが、戦争中は余り気づかなかったわけですが、戦争に日本が負けて、翌月、1945 年 9 月にイギリス軍の墓地搜索隊、つまり戦争捕虜でたくさん亡くなったイギリス人兵士を搜索する、イギリスの墓地搜索隊に通訳として加わります。そのときに戦争が非常に悲惨だったということをご自身があらためて自覚するんですね。

左の写真が永瀬さんが現役の通訳だったときの写真で、その後、実はこの永瀬さんというのは、1964 年、戦後 19 年たってから、タイに行き始めます。亡くなる 2011 年まで 135 回タイを訪問しています。その理由は 2 つあります。

1 つは、自分が通訳として連合軍の捕虜へのひどい仕打ちに、間接的ではあるけれどもかわったことへの罪の意識、贖罪の意識を償うため。そしてそのときの連合軍の捕虜だった人たちと一人でもいいから和解をするためです。

もう 1 つは、日本が戦争に負けて、タイから日本軍が引き上げるときに、当時のタイ政府は、全ての日本兵に米 1 合と砂糖を飯ごうのふた 1 杯分、もちろんわずかですが、これを全ての日本兵に支給してくれたそうです。これに対するタイ政府への恩に報いるために、とにかくタイのために何かつくそうということで、戦後何度もタイを訪れました。

1964年というのは、東京オリンピックが開催された年なんです。東海道新幹線が東京・新大阪間開通した年でもあり、日本人の海外旅行の自由化がなされた年でもあります。つまり、その年までは勝手に日本人は外国に行ってはいけなかったんですね。ところが、1964年から自由に行けるようになります。もちろん高いです。当時ハワイに社員の研修旅行で行ったある大手銀行、1人当たりの費用は35万円、当時で。今に換算すると何百万かなと思いますけれども、そういう時代。1ドル360円ですね。いずれにしても、一応自由に海外に行けるようになったので、その年から行くようになりました。そして、奥さんも一緒に活動するようになる。

アジア人労務者、連合国捕虜への贖罪、タイ政府への感謝ですね。1986年には、タイにおいてクワイ河平和寺院というお寺というお寺を建立され、クワイ河平和基金というのをつくられて、基金を募るんですね。お金を集めて、それを全部タイの子供たちへの奨学金に充てるということをしたんです。

捕虜との和解に関しては、これは有名ですが、永瀬隆さんとロマークスさんというイギリス人元捕虜との和解の話が、この「レイルウエイ運命の旅路」という映画、これは3年前に公開されましたけれども、永瀬隆さんの役は日本人の真田広之さんが演じていますけれども、この中で扱われています。

その映画の中に出てくるシーンがあるんですけども、永瀬隆さんが通訳として、このロマークスさんを虐待している。本人が虐待するというか、上官が虐待しているのを通訳としてやっているシーンが撮影されたのが、このカンチャナブuri市内にある廃工場。この辺、近くにいた人にタイ人にも聞いてみたんです。撮影があったのを知っていますかと。残念ながら誰も知らなかった。3年前の映画ですから、4、5年前にロケがあったんでしょうけれども、地元の人はこのことは余り知らない人が多かったみたいですね。知っている人がいたら話を詳しく聞こうと思ったんですけども、残念でした。

永瀬さんは、2011年に亡くなるんですけども、亡くなった後、やっぱりこのすばらしい遺訓を引き継ごうという人がいます。これは一番最初に紹

介した「クワイ河に虹をかけた男」の著者であり、映画監督の満田康弘さんという方ですけれども、永瀬さんの遺志を受け継いで「クワイ河平和基金」にプールしてあるものを、毎年タイの子供たち、下は小学生から上は大学生まで、授与しようということをやっています。奨学金授与式は、今年も8月下旬に行われて、私も初めてですけれども参加させていただきました。

この右の写真に写っている、一番前に立っている男性は、もしかしたら皆さんたちの中にも行ったことがある、あるいはこれから行く人がいるかもしれないけれども、タイのタマサート大学の学生さんです。この平和基金の奨学金をもらったたくさんの子供たちの中から初めて、タマサート大学というタイの一流名門大学に入ることができたんですね。かなりシンボリックなことです。

その奨学金授与式の様子を少し。これまでにちょっとはつきり覚えていませんけれども、3,000人ぐらいの子供たちが奨学金をもらっています。今年も111人の子供たち、小学生から大学生までこうやって奨学金をもらいに、カンチャナブリ県の各地から集まってきている。最初のころは向こう側に立っていられなかった看護士さんと、その人たちが高校生のころに奨学金をもらって日本に留学をしてきて、日本の看護学校で勉強して、タイに帰って看護士として活躍している。そういう人たちはとても永瀬さんのことを慕っていて中心になってお手伝いをしていました。

さて、さっき元連合国軍捕虜との和解という話をしましたが、和解といってもそんなに簡単ではない。やったほうは忘れるけれども、やられたほうは忘れない。JEATH博物館のところに、「Forgive but not forget、許そう、しかし忘れまい」という文字があって、これを見るたびに、やっぱり戦争というのは、そのとき人を殺し合ったりするだけでなく、何十年たっても、恐らくこれから何十年たっても消えない。許してあげても、このことは忘れない。忘れないというのは、やっぱり本当に許されているのかどうかですね。そういうことをいつも思います。

私も当然戦後生まれですし、皆さんたちはその下の下ぐらいの世代ですけ

れども、そういう戦争を直接経験していない世代が戦跡を歩く。戦争の記憶をつないで、紡いで、さらに伝えていく。その場に行って、肌で感じ、目で見、耳で聞いたことというのは、五感で感じられますので、それはとても大事なことだと思います。それをやはり誰かに伝えて、やっぱり戦争というのは1回おきたらもうだめなんだと。70年たっても、100年たってもだめなんだということを、一人一人が肝に銘じていくような気持ちを持つ。こういう人が増えるということは、少しでも平和に近づいていく一歩になるんじゃないかと思います。

最後に、この博物館の様子を少し。いろいろありますけれども結構生々しいですよ。

連合軍共同墓地、イギリス兵、オランダ兵が中心の、ここには右下の写真にあるように、名前が書いてあって、所属部隊が書いてあるんです。だから何となく6,900人が眠っているというのではなく、一人一人、この何とかさんというのは22歳で死んだんだ、この部隊にいたんだ、オランダの陸軍かということ、目で見、自分で感じることによって、何となく連合軍の兵士というのではなくて、一対一で向き合える。過去の歴史に生きた人たちに向き合える場ではないかなと思います。

今は世界各国からたくさんの観光客がやって来ていまして、この泰緬鉄道とそれをめぐる歴史を知らない人がたくさんいます。この右下の人たち、女性2人は、韓国の済州大学校日本語学科の学生です。最初知らなくて、韓国人ですかと聞いてしゃべったら、途中で日本語学科とわかって、日本語に切りかえて話をしましたけれども、この泰緬鉄道のことを知らない。何があったか知らないということでした。そういう人が増えているんじゃないかと思っています。

知らないでここを訪れるのと、知って訪れるのでは全然意味が違う。できるだけそういうことを皆さんに伝えたいのと、皆さんもカンチャナブリじゃなくてもいいですけども、そういう場に行ったときに感じていただきたいと思っています。

最後になりますが、私が14年前に、この博物館を何回目かの訪問をして、またショックを受けて外に出てきたんです。その前に70代のおばあちゃんがいまして。このおばあちゃんは去年亡くなったと聞きましたけれども、「どうしたの」って言われたから、ちょっとショックを受けてという話を、そのタイ人のおばあちゃんとしていましたら、「この博物館には日本兵のいろんな残虐な行為の展示があるけれども、みんながみんなそうじゃなかった。優しくくて親切な兵隊さんもいっぱいいましたよ」ということをおっしゃっていただきました。

優しくくて親切な人が狂気になる。狂気にならざるを得ないのは下っぱの兵士ではなく、上のほうの間違った、指導者の間違った歩み、考え方、やり方ですね。それでいかにたくさんの人が犠牲になったか。そういうことをしっかりと考える必要があるかと思います。

時間ぎりぎりになってしまいましたけれども、今日の私の話は以上で終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会：片山先生、ありがとうございました。

それでは、フロアの皆さんのほうから何か質問等があれば、挙手をお願いします。

質問：ありがとうございました。

1点質問がありまして、なぜ日本軍が引き上げる際に、タイの政府が日本軍に対して物資を供給したのか。というのも、日本は連合軍に対して残虐なことをしたにもかかわらず、タイの政府が寛容に供給できるということを疑問に思いました。

片山先生：質問ありがとうございました。とてもいい質問だと思います。

1つは、日本とタイ、同盟関係を結んでいたということがあると思いますけれども、もう1つは、当時のタイ政府の高官が言っていることは、これから戦争に敗れた日本兵は日本に帰ってもどれだけの苦難が待っているかわからない。それに少しでも報いたいという気持ちがあると。そういうことで支給してくれたんだそうです。

さらにその背景には、恐らくですけれども、タイは国民の95%が仏教徒ですので、やっぱり人に対して施しをする、いいことをするということが、自分に返ってくるんですね。そういうタイの仏教的世界観というのが背景にあったと思います。

司会：ほかに。

質問：このたびはお話ありがとうございました。

1つ気になったことがありますて、日本はタイの人々に対していろいろひどいことをしたりというのがあった一方で、お話の途中にあったように、タイはタイでイギリスとかに宣戦布告とかをしている感じで、タイの人々は一体第二次世界大戦をどういう視点で見えていたのかなと。加害者なのか、被害者なのか、あるいは敗戦国になるのか。どういう感じで世界大戦を見ていたのかというのが気になったので、教えていただけませんか。

片山先生：ありがとうございました。

大変いい質問ですけれども、すぐに答えにくい大変難しい質問ですね。やっぱりタイに限らず、戦争というのはやっている連合軍、イギリスやフランスやオランダやアメリカ、中国、そして日本、ドイツ、イタリア、そこだけがやっているわけじゃなくて、そういう戦争に巻き込まれているタイの人たちが山ほどいるわけです。そういう人たちが一人一人が個人的にどう考えていたかというのは、ちょっと知ることができませんけれども、書かれている資料とかつくられた映画などを見ると、やっぱりそんなにいいイメージは持っていなかった。日本に対しても、もちろん連合軍に対してもですね。やっぱり自分の国に入ってきて、踏みにじられ、勝手に戦争しているわけなのでよくなかった。

ただし、そういう中でも救いがあるとすれば、そういう集団と集団との関係とは別に、私たちは個人と個人で付き合うことができるので、そういう中でも一人一人がしっかり自分を持っていて、気持ちを持っていれば、少しでもそういうマイナスのものをゼロに近づける、あるいはプラスに変えることはできるんじゃないかなというふうに思います。

ちょっと簡潔にこれを答えるのは大変難しい問題ですね。巻き込まれている人たちがたくさんいたということを、私たちは肝に銘じないといけないかなと思います。

その中で、私はいつも思うのは、一人の力じゃ何もならないと、例えばもうすぐ選挙ですけども、自分が1票を入れたからといって政治は変わらんということを言う人がときどきいますが、そんなことはなくて、選挙に例えるのもちょっとおかしいんですけども、永瀬隆さんというのは、身長150cm幾つかのとても小柄な方なんです。でもそのたった一人の青山学院卒の先輩が成し遂げたことの大きさというのが、タイの奨学金授与式に行くときわかりますが、脈々と受け継がれている。彼が亡くなった後も。もちろん永瀬さんがご存命中は、たくさんの方が慕って、永瀬さんご夫妻とやってきておられましたけれども、それ以降も脈々と受け継がれる。ということは、たった一人の償いというか、行いというかなんですけども、ものすごい力を発揮することができるということを、この青山学院の歴代の先輩から私は学ぶことができました。

だから、うちの大学の学生にもよく言っているんですけども、自分が行ってもねということを思っている人は絶対間違いだから、一人の力とは大きいから、何か行動しなさい、感じなさい、やりなさいということを言っています。これはとても大事なことだと思います。それを青山学院の大先輩から学び、ちょっとかわり始めて、それを後輩である皆さんたちの前でこうやってお話できることは、本当に今日はありがたくて、楽しく授業をさせていただきました。

司会：ありがとうございます。

おおむね時間になったかと思います。

永瀬隆さん、私自身も青山学院に赴任するまで知らなかった大先輩です。その大先輩の方がさまざまな困難の中で、必死に抗い、そして歴史を精算しようとした。片山先生がおっしゃられたように、ごく小さな力だったかと思うんです。しかし、その取り組みというのは、今なおさまざまな人を揺さ

ぶる原動力になっています。

カンチャナブリというところ、先週、私の講義を受講している人には資料を渡したかと思いますが、完全に観光地です。皆さん、特にこれからタイに留学する人は、カンチャナブリに行くことがあると思います。私、マレーシアに行く学生にも当てはまることですが、皆さんは観光客じゃない。行っただけで観光するのでは無いのです。その点をふまえて、このようなことを調べて行くと全然違うと思います。

ちょうど時間になりました。改めて片山先生に大きな拍手をお願いします。  
(拍手)

それでは終わります。ありがとうございました。  
(了)